

ゴール設定とゴールに至るプロセスの考え方

（内容）

1. 事業マネジメントの構造
2. ゴール設定とゴールに至るプロセスの考え方
－ 認知症施策を例に －

令和4年12月7日
埼玉県立大学大学院／研究開発センター
川越雅弘

1. 事業マネジメントの構造

事業マネジメントの構造

(看取りの場合の例)

在宅医療・介護連携で目指している「地域の姿(ゴール)」
人生の最後の段階まで、本人が望む場所、
本人が望む形で療養することができる

④対策によって、現状がめざす姿にどの程度近づいたかを、何らかの指標を置いて確認する。

①両者のギャップが「課題」。多数挙がってきた課題の中から、取り組むべき課題を絞り込んで具体化する。

②複数考えられる対策の中から、より効果的な対策を選択するために、現状を引き起こしている「要因の分析」を行う。

対策の実施

③現状をめざす姿に近づけるために、関係者の力を総結集した「対策」を講じる。

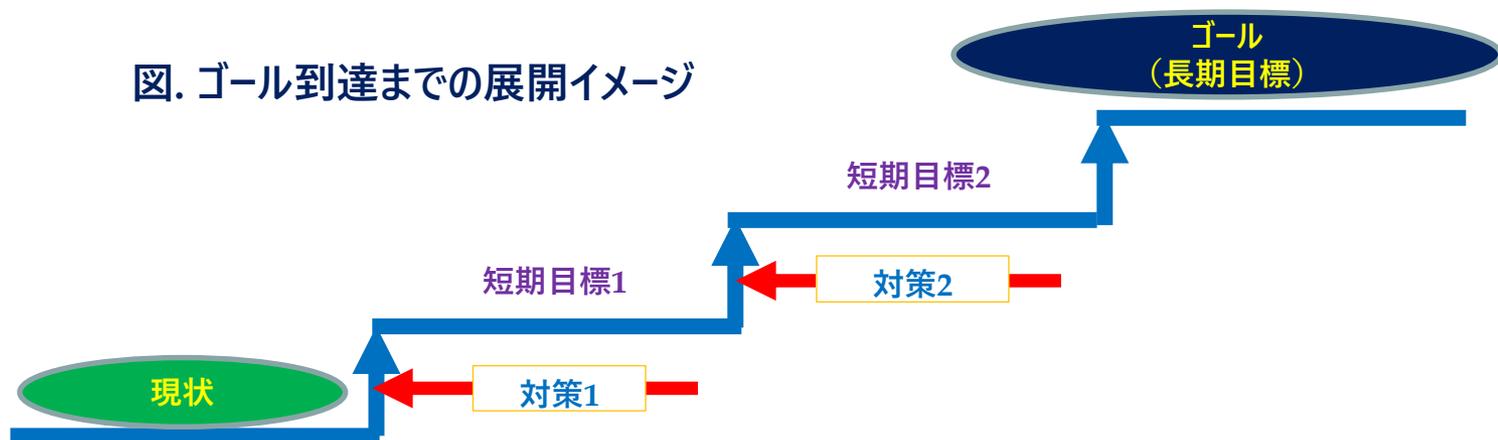
在宅医療・介護連携に関する「地域の現状」
人生の最後を自宅で迎えたいと望まれたとしても、
様々な理由により実現できない場合がある

2. ゴール設定とゴールに至るプロセスの考え方 —認知症施策を例に—

【ポイント1】ゴール・目標に対する意識をどこに置くか？

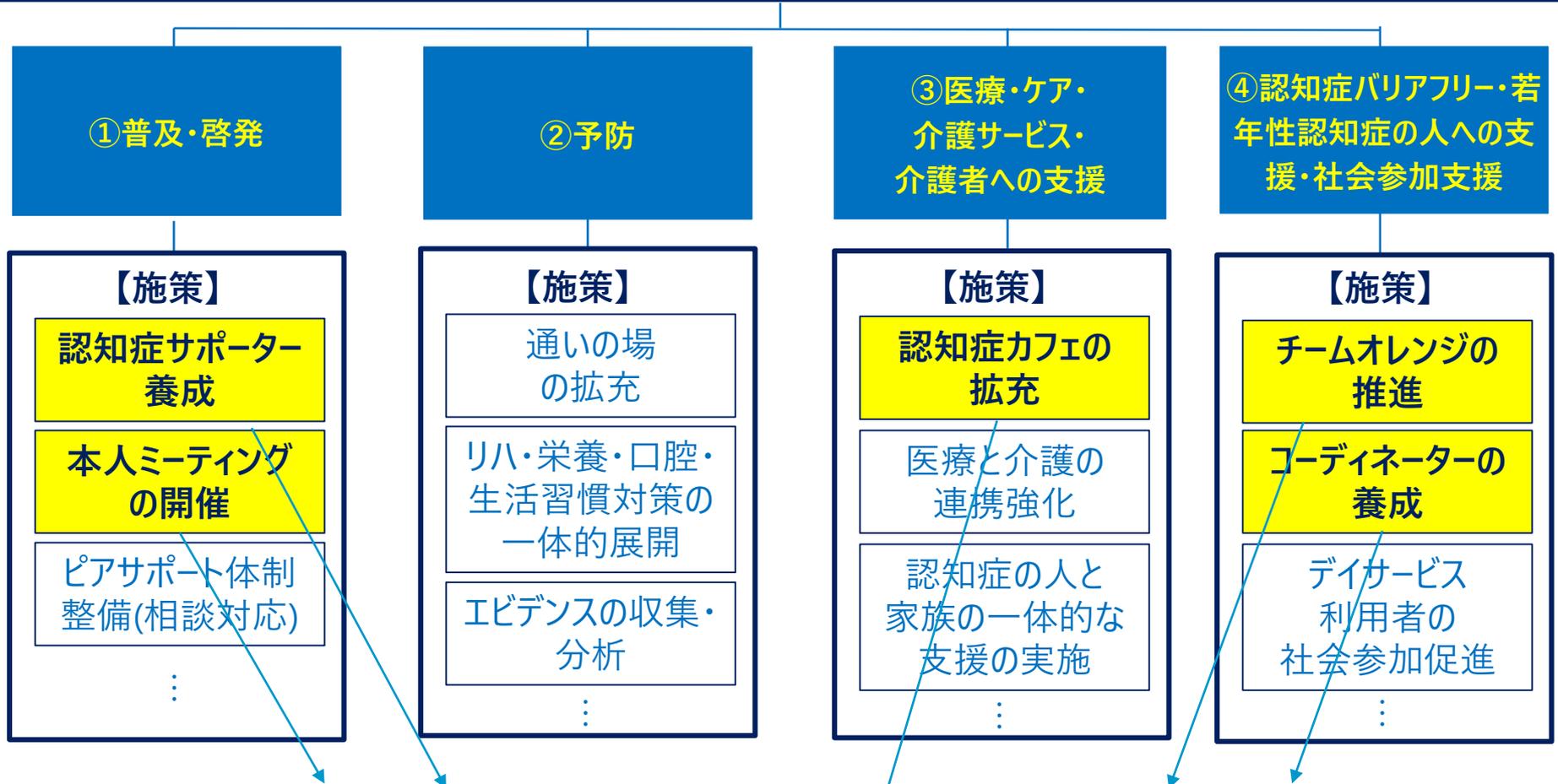
- 認知症サポーター対策に関するあなたのゴール・目標に対する意識はどちらですか？
 - 【例1】認知症サポーターを〇〇人養成すること。
 - 【例2】認知症のサポーターを〇〇に活用すること。
- 例1では、養成数が目標値となる。仮に目標値をクリアできたとしても、ゴール(例:認知症の人が不安なく暮らし続けられる)に近づいたかどうかはわからない(評価できない)。
- 例2では、養成⇒活用までの展開に必要な要素とそのプロセスを考える必要がある。例えば、必要な要素としては、①サポーターが養成されていること、②認知症本人や家族の支援ニーズが把握されていること、③各サポーターの支援可能な内容が把握されていること、④認知症本人・家族の個別ニーズに対し、誰がいつどのように支援に入るかを関係者間で検討する体制や場が用意されていること、⑤④を決めるコーディネーターがいることなどが考えられる。あとは、これら必要要素をどのように展開するかを考える。

図. ゴール到達までの展開イメージ



【ポイント2】ゴールを意識しながら、「様々な施策をどのように組み合わせ、また、どのような手順でゴールに到達するか」を考える

【基本理念】認知症本人と家族が、住み慣れた地域や自宅で、不安なく、今までと同じように暮らし続けられる



<ゴール> チームオレンジとサポーターが連携しながら、認知症本人・家族の意向に沿った支援を行うこと

- 本人や家族の **支援ニーズを把握する** (本人ミーティング・認知症カフェなどの場を使って)
- 認知症サポーターに対し、**支援が可能な時間帯や支援内容を確認する**。
- コーディネータやチームオレンジが、**支援ニーズとニーズに対応できるサポーターをマッチングする**。